

演題：「夢を持って高校生活を」

期日：令和5年10月30日（月） 会場：弘前工業高等学校体育館

期日：令和5年10月30日（月） 会場：尾上総合高等学校体育館

【講演の記録】

どうもみなさま、おはようございます。手拍子で迎えていただいて大変ありがたく思います。私が落語家の桂歌若でございます。まずは落語という芸をお楽しみください。

今日は600人くらい生徒さんがいらっしゃるようですが、生で聞いたことがなくても、テレビやYouTubeなんかを見て、落語って大体こんな感じなんだろうと思っているんじゃないでしょうか。着物を着たおじさんが一人でいろんな登場人物を演じ分けておしゃべりをするという芸です。ただ、しゃべりだけですと伝わりにくい表現もありますので、小道具や扇子を使ったりもします。落語の前に簡単な小噺をご覧ください。

これはある動物の噺でございます。お父さんとお母さんと子どもの家族がドライブに出かけました。そのドライブ中の家族が交通事故を起こして、家族全員病院へ運ばれてしまいました。事故現場には警察官がやってきて、どんな事故が起きたのか確かめることになりました。「いやー弱ったのがねー、家族三人が病院に運ばれたけど、何が事故原因かがさっぱりわからないねー。」すると、ちょうど家族が飼っていたであろうペットの猿が近づいてきました。「ウキーウキーウキーウキー！」「ん？なんだこの猿は。ひょっとしてあの家族が飼っていた猿なのかなあ？」「ウキーウキーウキー！」「おおそうか、じゃあ俺の言っていることがわかりそうだ。猿、お前にいろいろ聞いていいか？」「ウキキキキキー！」「じゃあまず聞くけど、たしか子どもが乗っていたよな？その子どもは何をしていたんだ？」（→ゲームのしぐさをする猿）「ああなるほど、ゲームをしていたのか。じゃあ、お母さんは何をしていたのかな？」（→鏡を見て化粧をするしぐさをする猿）「ああなるほど、鏡を見て化粧を直していたのか、そうだったのか。じゃあたぶん、お父さんがハンドルをにぎっていたんだと思うけど、お父さんは何をしていたんだ？」（→ビールを開けて飲むしぐさ）「なんだ？ひょっとしてビールかそれは？これで事故の原因が大体わかったぞ、お父さんがビールを飲みながら酔っ払い運転をして事故を起こした！そういうことだな、わかったわかった。猿、ご苦労だったな、お前は一体そのとき何をしていたんだ？」（→運転をするしぐさ）

まあ、こういう小噺でございます。簡単に解説いたしますと、子どもはスマホかニンテンドースイッチかなんかで遊んでいたんでしょう。お母さんは、鏡を見て化粧を直していた。お父さんは見ての通り、ビールを飲んでいて、実は猿がハンドルを握って車を運転していた。これが落語の簡単な小噺でございます。（→この猿の小噺と九官鳥の小噺の後、落語「つる」を披露）これが落語というもので、これを普段から生業としております。

私のことを簡単に紹介させていただきます。おそらく今日集まった生徒さんは、私のことを名前を見たこともなければ、聞いたこともないのがほとんどだと思います。生まれは弘前で、今は家族は誰も住んでおりません。ですから弘前にあるのは、実家の墓と、建物が古くなって壊したので土地だけが残っている。要するに無駄に固定資産税を払うという状態です。

こちらの先生に話を伺いましたら、卒業して半分以上は就職なさるんですね。何割かは進学もするようですが。三十数年前、電波工業高校に通っていた私も、本来は就職の道でした。

ただ私、昔からある信条が「働いたら負け」。高校卒業して就職したくないのでどうすればいいんだと担任の先生に相談しました。「世の中には専門学校というところがある。そこは、特に勉強しなくても入

学金さえ払えば、合格できる」と言われて、東京の専門学校に行きました。マスコミ業界向けの人材を育成するという専門学校でした。特にそこに入りたかったわけではないんですが、働きたくなかったというのと、何となく弘前という土地を離れて東京のようなところに住んでみたいというのがあったので、とりあえず2年間遊ばせてもらって、卒業するときにまた考えようという軽い気持ちでした。入学金や授業料も高いんですが、今となっては親に申し訳ないことをしたと思っております。そこに通い始めたんですが、もともと目的があって行ったわけではないので、すぐに通わなくなりました。ただ、その頃から旅行が趣味でして、アルバイトして日本を旅行してまわっていました。

学校にも行かずぶらぶら過ごしていたんですが、学校の近所に新宿末廣亭という寄席があるのを見つけました。もともと落語とか、漫才とか、お笑いは好きだったんです。今以上にテレビ番組とかラジオ番組とかで、寄席中継とか落語の番組とかがたくさんありました。たまたま近所に寄席を見つけたので、一度見てみようということになりました。それで見たのが、なかなか面白かったんです。落語をやったり、漫才をやったり、曲芸をやったり。それからアルバイトの合間に寄席に通うようになりました。しばらく通っているうちに、「落語というのは一人でしゃべる芸能だから、漫才と違って相方もいないし、これなら俺でもできそうだ」と思うようになり、これが落語家になるきっかけでございました。

実はその時に思い出したことがあって、私自身特別に訓練したとか、稽古したとかではないんですが、どうも昔からしゃべるのがうまかったらしいんですよ。おそらくみなさん方も何かあると思うんです、そういったことが。誰かから特別、教育されたわけではなく、強制されたわけではないけれど、なぜか学校の勉強が得意だとか、スポーツが得意だとか、絵が得意だ、中には生まれつきイケメンとかね。ひょっとしたら、昔から人から言われてきたことが商売の役に立つんじゃないかと、その時初めて気がついたんでございます。

特に三年生なんかは、進学だったり、就職だったり、生き方がこれからガラッと変わっていくはずでございまして、自分の好きなことであったり得意なことであったりを何か認識していると必ず役に立つはずですので、今のうちに見極めておくといいんじゃないでしょうか。

人と比べて自分が優れているものというのは、家庭の中ではわからないんですね。たくさんの方が集まる場所、みなさんですと、学校ですよ。今までは、家族の中、親戚の中、あるいは隣近所、狭い世界だったのが、小学校に入学してはじめて多数の得体のしれない連中と顔を合わせることになる。中学校もそうですし、高校もそうです。そういうときに、自分は人とはこういうところが違うんだというのがわかるんですよ。学校に通う、勉強することはもちろん大切なことですし、友人をつくることも大事、就職・進学に有利になるよう頑張ることも大事なんですが、自分がいかに他人とは違うか、そういったところを見極める場でもあります。よく周りのことを見ておくのがいいと思います。

実際どういうふうに着落語家になったかですが、私の師匠は、みなさん方の世代はピンとこないかもしれませんが、桂歌丸という人です。歌丸を師匠に選んだんですが、これは「就活」ですね。「しゅうかつ」と言っただけで、死ぬ方の「終活」ではありませんよ。私が落語家になろうと決めたのは、西暦でいいますと1987年。まだネットというのは言葉すらなかった時代です。

今、落語家になろうと思ったら、Google先生に聞けばいろいろ教えてくれます。今日の私のプロフィール見て、自分のウィキペディアを丸写ししたんだなとすぐにわかりました。みなさん、ウィキペディアを見たことはありますか？あれは、半分は間違っていますから。暇だったら、自宅のPCでもスマホでもなんでもいいですけど、私のウィキペディアを見てみてください。三分の一は間違っています。このあいだもチェックしたんですよ。「あ、自分の知らない情報が載っているな。」と。だから、あまりウィキペ

ディアをあてにしない方がいいです。私の知人に大学の教授がいるんですが、とある分野の専門権威なんです。本・著作を何冊か書いています。試験の時になりますと、自分でウィキペディアを編集してわざと間違えた情報を載せておくんだそうです。そうすると頭の悪い生徒というのは、ウィキペディアを丸写しにしてレポートを提出するからすぐに落第する。だから、みなさん方も何かレポートをネットで見つけた時は裏をとることを忘れないでいただきたいと思います。

そういった、ネットも何もない時代にどうやって歌丸のところに弟子入りしたか。何度も寄席に通っていますから、従業員と顔見知りになるわけです。今でも寄席に行くとかわかんと思います。基本的に若い人は来ません。年寄りオンリーですよ。それで若いやつがいるもんだから、当然目立つ。従業員の兄ちゃんと、寄席に行くたびに話をするわけです。そのときに、従業員の兄ちゃんに「落語家になりたい」と私は言ったのでございます。「誰の弟子になりたいの?」「誰がいいですかね?」「なんだ、好きな人いないのかよ、じゃあ歌丸さんのところはどうかね」と言われたんですよ。今から三十数年前は、テレビに出ている、本当に売れている人のところにしかお弟子さんが行かなかった。その寄席の従業員が言うには、「歌丸さんのところはね、確か弟子が少なかったからあそこならいいんじゃないか。」と。

芸能に興味のある人は、誰かの弟子になりたいという時、その人が大好きだとか、その人の芸に惚れてるんだとかを思いがちなんです。そういうやつは大体ダメなんです。なんでかというと、男女の恋愛と一緒にございまして、好きな相手がいて付き合っているとき、大体途中で失望します。みなさん方に下を向いてる方もいますけど、そのうち大人になればわかんと思います。本当に好きであればあるほど何かちょっとしたすれ違いで裏切られたときに失望するんです。それは人間関係でもそうですし、これから就職・進学をする場合でもですよ。好きは好きでいいんですが、ある程度客観的に距離を置いて見ることができないと、なかなか自分の思うようにはいかないかと、だいぶ経ってから気づいたことです。

私も特に桂歌丸という人が好きだったわけではないんですが、「この人ならいいんじゃないの?」というかたちで薦められて入門を決めたわけでございます。

その従業員にある日、(歌丸氏の)住所と電話番号のメモ書きをもらいました。電話をしたら歌丸本人が出てきて、「私はこの日は家にいますから、よろしければ来てください。」と。それで、その言われた日にデパートで菓子折を買って家へ向かいました。その時にいろいろと聞かれました。「君は落語が好きなのか?」「子どもの頃から寄席の演芸番組(を観ること)ですとか、最近は新宿末廣亭とか浅草演芸ホールとか、寄席に通うのにハマっています。」「何か好きな落語家さんはいるのか?」根が正直だったものですから、「特にいません。」と。「じゃあなんで私のところに?」「寄席の兄ちゃんに聞いたんです。師匠のところだったらお弟子さんが少ないから。」と。「君は正直だねえ。」と、まあ半分呆れ顔で言われましたが。

結果的には、あとで師匠に聞いたらそれがよかったんだそうでございます。あまりにも師匠の芸が好きだとかになると、素直な気持ちで師匠の教えを受けることができなくなってしまい、修業の妨げになる。どうしても好きな落語家さんがいるのならば、弟子になるのではなく、ファンのままでいなさいというふうに言われたことがありました。それで「君のことを弟子にしましょうか」となったんです。

じゃあ実際、落語家ってのはどんな修業をするのかと思うでしょう?東京の落語界の場合ですと、階級制度があります。下から前座・二つ目・真打と階段を上がっていきます。一応真打になると一人前ということになるんですけども、もっとも真打になったからといって終わりというわけではありません。それぞれの階級において修業の段階がありまして。

では前座修業というのは何をするのか、これは師匠いわく、「人間の修業である」と。二つ目は何の修

業なのか、「芸の修業である」と。一人前の真打になったら、「人を育てる修業だ」と。入門するときに言われたんですがその時はさっぱり意味がわかりませんでした。もっとも今はキャリアも大分長くなってきてますので、師匠の言わんとすることの意味がわかるようになってきました。

最初の「人間の修業である」とはどういうことか、落語家らしさ・噺家らしさを身につけるんだそうでございます。落語ってというのは5年や10年やったくらいで身につくもんじゃなくて、死ぬまで修業だといわれるような社会ですから、入門して2年や3年の若造がうまくなるわけがないんです。だから芸の善し悪しじゃないんです。落語家らしさを身につけるといって修業なんですよ。みなさん方もね、(落語を)今日初めて見て、誰だかわからないけどたぶんこのおじさんは落語家だろうと、ほほみなさんが思ったはずですよ。なぜかといいますと、落語家らしさというものがちゃんとオーラとして出ているわけですよ。でも入門したての若造だと、匂いというかオーラというか気というものはまったく出ていません。

落語家らしさを身につけるために、大体4年くらい寄席で修業をするんです。寄席というのは1年365日朝から晩まで必ずやっています。そこへ通うんですよ、毎日。休みはないのか？ありません！労働監督基準局に行ったら一発でアウトな、特にブラックですよ。寄席はお昼に営業している昼席、夜に営業している夜席、昼夜2つの興行がありまして、お昼から夜終わるまで、寄席の楽屋に行って、師匠・先輩方のお世話をするというのが修業になるんです。年寄りが多いですから、入門した当時は、俺はなんでこんな介護施設に入ってしまったんだと思ったくらいですが。売れてる人もいれば、まったく見たことも聞いたこともない人もいるわけで、いろんな落語家さんのお世話をします。お茶を出したり、話し相手をしたり。いろんな落語家さんにふれて、実際、生の落語をたくさん聞いて、そういう修業を繰り返していると、段々落語家らしさというのが身についてくるんですよ。

みなさん方も高校に入学したばかりの頃、なんだか中学生みたいな感じだなと、周りから見られたはずです。それが2年3年経つてくると、段々高校生らしい図々しさが身についてくるんです。卒業するころには、「立派な高校生になったな」と自然となるんです。これは就職してからもそうですね。一生懸命やれば、そのうち見ただけで「あの人はこの会社の人だな」と空気でわかるようになっていくんですよ。落語家の場合、石の上にも三年ではありませんが、4年くらいかかるのでございます。まさに楽屋に缶詰めですよ。修業をして、らしさが出てきたところで前座修業を終わって、二つ目での修業になるんです。

じゃあこの二つ目ってのは何なんだ。今から100年くらい前です。寄席の番組表で、若手の芸人は、前座の後の二つ目に(高座に)上がるから、若手芸人そのものを称して二つ目、それが語源になったんです。若手芸人の扱いになりまして、大体十年くらいの期間がかかりました。前座修業を終えて、らしさが身につきましたから、楽屋で師匠・先輩方の世話をすることはないんですよ。寄席に出番があれば、自分が決まった出演時間になるので、それが終わった後は帰ってもいいわけですよ。用事がなければ家で寝てもいいわけですよ。この十年の間に、自分は将来どういう落語家になりたいのか、どういう芸をしていけばいいのかということを模索するわけです。

ただ、私も前座修業が終わって二つ目になったというときというのは、十年間長いなと思ったんですが、いざ二つ目の修業が終わって真打になるときは、ずいぶんあっという間だったな(と感心しました)。だから長いようで案外短いのが十年という期間です。自分が将来どうなるのかについて試行錯誤して十年経つと、何となく自分がこれからどう進みたいのかというのが不思議なもので決まってくるんです。

それが済みますと、真打になれるんです。入門してから十四年かかるのが今のシステムです。もっと

も、真打になったからといって終わりではございません。真打になっても後から続く後進を育てなければなりません。後輩のために、弟子をとったり、弟子以外の者にも先輩として範となるような振る舞いであったり、あるいはアドバイスを送るわけです。そういうのが延々と続いていって、この落語の社会というのがあるわけです。大体200年くらいあるわけですね。

最後に、芸に一番必要なものは何かを説明して終わらせていただきます。「芸は人なり」という言葉がありまして、どういうことかという、素直な人間性が求められるんです。素直な人間性というのは、師匠や先輩方のアドバイスをひねくれることなく素直に受け止める（ということ）。これが間違ってもいいんです。間違ったら後で直せばいいんですから。ただ、その場はビシッと素直に聞くという姿勢が非常に大事なことで、これができていないと我々の世界では、「あいつはひねくれ者だ」と批判を受けるのです。これは落語の社会だけではなくて、「芸は人なり」とは言いますが、やはり社会においても「人なり」、素直な人間性が求められるんです。

ではその素直な人間を見極めるためにはどうすればいいか。これは私も入門してすぐ師匠に言われたことです。「君は箸とペンを正しく持てるかい？」と言われたんですよ。私は、祖母が大変しつげに厳しい方だったので、箸もペンもちゃんと持てます。それが普通だと思ってたんですが、「なぜそんなことを聞くんですか？」と言ったら、「箸とかペンの持ち方というのは、間違っていたら必ず今までの人生で一度や二度は、親とか教師から間違っているよと言われてたことがあるはずなんだよ。でもそれが直らなかつたということは、そもそも他人の話を素直に聞く耳ができていないということだよ。」と言われました。言われてみればそうだなあと思いました。ここの生徒さんは大丈夫だと思いますが、もし自分がペンの持ち方とか箸の持ち方とか間違っていると思ったら、今のうちに直しておいたほうが、有利だと思います。素直さというのは、必ず大人になってからも、うけるわけです。あいつは素直でいいやつだなあとか、一緒に会食をしたいなあとか、きちんと食事のマナーができていればこいつと飯を食べていても安心だなあとかになるんですよ。このへんのところは年をとればとるほどわかってくるのですが。とにかくこれからの人生は、なるべく素直に。腹の中ではなくそじじいと思っけてもいいですから、とりあえず他人から何か意見を言われたら、素直に耳を傾けて気持ちを受け止めて大人になっていただければ、少しはましな大人になるんじゃないかなと思います。といったところで、どれくらい役に立ったかはわかりませんが、私のしゃべりはこの辺とさせていただきます。どうもありがとうございました。